学生による学生支援

駒澤大学
キャリアセンター　係長
CDA
石丸秀敏

３年生との座談会

1　クルーセイルの成り立ち

平成17年、就職活動を終えた学生有志で立ち上げた就活応援団体がある。その名はクルーセイル。それは、「多くの学生がclue（手がかり、きっかけ）を掴み、就職活動という長い道のりにsail（帆）を掲げて進んでほしい」という理念のもと、就活生にその『きっかけ』と、納得のいく就職活動に向けたイベントを提供するものである。そしてキャリアセンターは、そのサポートを行っている。

クルーセイルは、卒業までの数カ月という時限活動のため、就職活動中の後輩へその引き継ぎができない。一過性の団体という印象をもつかもしれないが、毎年キャリアセンター窓口には「先輩から受けた恩は下級生に返したい」と申し出る学生がいる。また我々も内定報告をしに窓口へ来てくれた学生に声を掛けることで毎年組織化されている。昨年は5学部13学科から61名が集まった。

2　昨年の取り組み

２０１６卒学生から就職活動の開始時期が後ろ倒しになり、その影響で昨年の3年生にとっては情報不足、先が読めないスタートとなった。そこで早期に就活を終えた複数の4年生が、5月の就職ガイダンスから協力をしてくれた。3年生前期のキーワードは夏季インターンシップ。4年生は自らの体験を通した学びや気づきを約１８００名に語ってくれた。成功体験よりも失敗例を話すことで、後輩の不安を払拭させようとするのはいかにも先輩らしい。秋には3年生と語る座談会も複数回開催。3年生にとって4年生の存在は、外部コンサルタントとは一味違う親近感もあるようで、素朴な疑問や小さな不安を吐露し、4年生は自らの経験を踏まえて丁寧に応えていた。

さらに他のメンバーは、低学年（1・2年生）向けキャリア支援プログラムで活躍してくれた。パネルディスカッションでは、自らの学生時代の過ごし方を等身大で表現。アルバイト・部活動・海外ボランティアなど2年前の自分を語り、その経験の中で意識や行動の変化に繋がった「転機」の話題では、1・2年生の眼差しも真剣になっていた。

3　役割を通じた成長

本活動の効果は、クルーセイルである4年生側にもある。①学部横断の組織体として就職活動後も多様な価値観とのふれあいができること、②人に語ることで自ら描く仕事観や職業観の確認ができること、③後輩の面倒をみることで醸成される母校愛、④自ら考え行動する大切さとその成果を感じることができること等が挙げられる。

実際、各回のプログラム終了後は、自然と反省会（振り返り作業）が行われている。立ち会っていた職員にフィードバックも求めてくる。さすがに4年生、次回に向けて「どうすれば?」を議論の中で追求していく。キャリアセンターとしてはプログラム実施にあたり、主旨とゴールだけは共有して、なるべく運営は任せる。必要以上に干渉しないこと、サポートというスタンスを維持することに注意を払っている。それが本活動を通じた4年生のキャリア・デベロップメントに繋がるからである。そしてそれは、クルーセイル自身も感じているところである。

4　クルーセイルがもたらすもの

現在、キャリアセンター主催の支援プログラムは多岐にわたる。その中で、「学生による学生支援」の団体が活躍していること、またその活動が脈々と受け継がれていることは、本学のキャリア支援・就職支援において大きな特徴となっている。加えて、卒業後もＯＢ・ＯＧとして他のプログラムに駆けつけてくれるのは、在学時に築くことができた信頼関係の深さともいえる。

内定獲得までの就職支援に意識が向きがちになる中、我々はキャリア支援の更なる発展性とその『手がかり』をクルーセイル学生の成長ぶりから学んでいる。